

福岡工業大学 機関リポジトリ

FITREPO

Title	EPP素性と主要部移動の関連
Author(s)	宗正佳啓
Citation	福岡工業大学研究論集 第46巻2号(通巻71号) P69-P82
Issue Date	2014-2
URI	http://hdl.handle.net/11478/1269
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher

Fukuoka Institute of Technology

EPP 素性と主要部移動の関連

宗 正 佳 啓 (社会環境学科)

EPP-feature and Head Movement

Yoshihiro MUNEMASA (Department of Socio-Environmental Studies)

Abstract

The Extended Projection Principle (EPP) essentially operates in the syntax. In Chomsky (2000, 2001), the EPP is modified as part of feature checking machinery and is treated as a feature requiring an overt element in the Spec position of a projection. In addition to this EPP-feature, this paper proposes a new type of EPP-feature. The EPP-feature requires an overt element in the head position of a functional projection. If, however, universal constraints are subject to $[\pm\text{EPP}]$ specification by individual grammars, the different specification provides a theory of language typology. The interaction of EPP-feature specification and the notion of feature percolation can serve to provide a straightforward account of a set of puzzles concerning the distinctive patterns of *wh*-movement and head movement.

Key words: *EPP(Extended Projection Principle)-feature, specifier, head movement, language variation*

1. 序

A 移動と A バー移動に関しては、最近の極小性理論に基づく分析では、素性の一致関係が移動の演算上の動機付けになっており、解釈可能な素性と解釈不可能な素性、及び EPP (Extended Projection Principle) 素性を仮定することで、A 移動と A バー移動を統一的に扱うことが可能になっている。特に、顕在的な移動に関しては EPP 素性が深く関わっている。他の移動の種類としては主要部移動があるが、A 移動と A バー移動と同列のものとして扱うかどうかは理論的問題となっている。しかし、主要部移動に関する多様性については統一的に扱われてはいない。

本稿は、移動を駆動する EPP 素性には 2 つのタイプがあり、それを仮定することで自然言語の様々な *wh* 疑問文のパターン、その通時的差異、さらに主要部移動に関する通時的・共時的言語差異に、直接的且つ統一的説明を与えることを目的とするものである。

2. EPP 素性

普遍文法の原理の一つである EPP は、TP の指定部に義

務的に顕在的な要素を要求する (Chomsky (1981, 1982), Alexiadou and Anagnostopoulou (1998), Holmberg (2000), Miyagawa (2001), Haeblerli (2003), Landau (2007) 等参照)。もし、動詞が主語の項を持たない場合は、TP の指定部には虚辞 (expletive) が生起する。

(1) a. *(John) hit Mary.

b. *(There) arrived a man from America.

Chomsky (1995) はこの EPP の要請を特定の素性照合に還元し、TP の指定部に義務的に顕在的な要素が生起するのは、TP の主要部の T が強い D 素性を持つからであると考えている。言語において、演算システムは、LF と PF とのインターフェイス条件として、読みとり可能な最適なものを提供する必要がある。強い素性というものは読みとり不可能な素性であるため、派生の段階で取り除く必要が出てくる。そこで、強い D 素性を持つ T は主語の VP の指定部からの移動を誘発し、TP の指定部に移動した主語と D 素性の照合を行うことで取り除き、インターフェイス条件を満たす。

Chomsky (2000, 2001) の枠組みでは、その強い D 素性は EPP 素性に変更されることになる。この EPP 素性は解釈不可能な素性 (uninterpretable feature) として考えられている。解釈不可能な素性は以前の強い素性と同じく読みとり不可能な素性であるため、インターフェイスに至る派生の途中段階で取り除かれることになる。従って、T が解釈

不可能な素性である EPP 素性を持つば、主語が TP の指定部に移動し、両者の間で素性照合が行われ、その解釈不可能な素性が取り除かれる。この EPP 素性の照合に関わる T は、C や v などの核となる機能範疇 (core functional category) の一つであり、Chomsky (2000, 2001) では、EPP 素性の指定は T 以外の機能範疇にも指定される可能性が示唆されている。これらすべての核となる機能範疇は、セレクションによって完全なる ϕ 素性を持つことが可能である。T は C または V によってセレクトされ、それによって完全なる ϕ 素性を持つ。T と v は動詞の特徴を反映した要素をセレクトする。従って、もし T が EPP 素性を持つのであれば、他の核となる機能範疇も EPP 素性を持つことが可能になる。また、wh 疑問文において C に EPP 素性が指定されれば、顕在的な wh 句が CP の指定部に生起することになる。一方で、v に EPP 素性が指定されれば、アイスランド語に観察されるように、顕在的な目的語の移動 (object shift) が生じる。

このように EPP 素性は、核となる機能範疇の指定部に顕在的な要素を要求する素性であると見做される。もし、EPP 素性が核となる機能範疇に指定されなければ、その機能範疇の指定部に顕在的な要素は現れない (例えば、日本語の主語が非顕在的になる場合など)。核となる機能範疇は、その主要部にも顕在的な要素が現れない場合がある。そこで、類推で EPP 素性には 2 種類あり、一つは投射範疇の指定部に関わる素性、もう一つとして、投射範疇の主要部に関わる素性を仮定することにする。仮に前者の EPP 素性が核となる機能範疇に指定されれば、その指定部に顕在的な要素が現れ、そうでなければそこに音声的内容を持った要素は現れない。例えば、英語では T に指定部に関する EPP 素性が指定されるので、主語が TP の指定部に具現化するが、イタリア語では T に指定部に関する EPP 素性は指定されないため、非顕在的な要素、つまり pro が生起する。一方、後者の EPP 素性が核となる機能範疇に指定されれば、顕在的な要素が主要部に現れ、そうでなければ、そこに音声的内容を持った要素が導入されないことになる。例えば、英語の埋め込み平叙文では、補文標識の that が導入される場合とそうでない場合があるが、導入される場合、C に主要部に関する EPP 素性が指定され、音声的内容を持つ that が導入される。しかし、主要部に関する EPP 素性が指定されなければ、音声的内容を持たない要素、つまり null-that が導入されることになる。¹

以上のことから、核となる機能範疇の主要部と指定部に現れる要素の分布に関して、媒介変数を設け、分布の相違はそれぞれに対する EPP 素性のプラスとマイナスの値、則ち head [\pm EPP], Spec [\pm EPP] で扱うことができると考えてみる ([+EPP] は EPP 素性が導入され、[-EPP] は導入されないことを意味する)。

(2) head [\pm EPP], Spec [\pm EPP]

EPP 素性は、機能範疇に指定される素性と結びつき (例

えば、wh 疑問文であれば C に指定される Q 素性と wh 素性)、そのプラスとマイナスの値が特定言語の言語資料に基づいて決定されることで、その言語の機能範疇の指定部及び主要部の顕在性、非顕在性に関する特徴が決定される。

この値の媒介変数の直接的帰結の一つとしては、自然言語のすべての wh 疑問文のパターンの説明である。指定部に対する [+EPP] と [-EPP] は、それぞれ相反し、wh 疑問文の CP の Q 素性と wh 素性を持つ C に [+EPP] が指定されれば、CP の指定部への wh 移動が誘発され、[-EPP] が指定されればそれがブロックされることになる。しかし、この [\pm EPP] 素性が個別文法によって異なった指定を受ければ、言語の類型的特点を予測する。つまり、wh 疑問文の CP の Q 素性と wh 素性を持つ C に、指定部に対する EPP 素性として [-EPP] と指定されれば、wh 移動がない言語の体系が形成され、[+EPP] と指定されれば wh 移動を誘発する言語の体系ができあがる。同じことが wh 疑問文の CP の主要部の顕在性、非顕在性にも当てはまり、その C に主要部に対する EPP 素性が [+EPP] と指定されれば、顕在的な要素が C に具現し、[-EPP] と指定されればそうした要素は具現しない体系が形成される。

では、そうした体系の具体例を見てみよう。

(3) *English* C (Spec [+EPP], head [+EPP])

[_{CP} What did [_{TP} John buy]]?

(4) *Indonesian* C (Spec [+EPP], head [-EPP])

[_{CP} Mengapa [_{TP} dia pergi ke situ]]?

why she go to there

'Why does she go there?'

(5) *Mandarin Chinese* C (Spec [-EPP], head [-EPP])

[_{CP}[_{TP} hufei mai-le shenme]]?

Hufei buy-Asp what

'What did Hufei buy?'

(6) *Japanese* C (Spec [-EPP], head [+EPP])

[_{CP}[_{TP} John-ha nani-o katta] no]?

John-Nom what-Acc bought Q-Part

'What did John buy?'

英語の主節の wh 疑問文においては、wh 移動と主語・助動詞倒置が観察される。

(7) [_{CP} What_i did_j-C [_{TP} John _{t_j} [_{VP} buy _{t_i}]]]

Chomsky (2000) の枠組みに従うと、(7)のような文において、CP の主要部の C は解釈不可能な素性である Q 素性を持っている。また、Chomsky (2000) の仮定によると、wh 句は解釈可能な Q 素性と解釈不可能な wh 素性を持つとされている。(7)の解釈不可能な Q 素性を持つ C は探査要素 (probe) となり、それと合致 (match) する wh 句を探し出し、その後一致を起こす。この一致により、C の解釈不可能な Q 素性と wh 句が持つ解釈不可能な wh 素性が削除されることになる。英語においては、(7)の C には指定部に関する EPP 素性が [+EPP] と指定されているため、wh 句が

CP の指定部に移動することで、この素性が満たされる。また、この C には主要部に関する EPP 素性が [+EPP] と指定されているため、それを満たすために、助動詞が T-to-C 移動によって C に移動する。他のゲルマン系の言語においても wh 移動が観察されるが、英語に見られる助動詞 do の移動はなく、動詞の移動によって C が顕在的な要素で埋められる、いわゆる V2現象が観察される (cf. Roberts and Roussou (2002))。²

SVO 言語であるインドネシア語は、英語と同じく wh 移動を起こす言語であるが、助動詞または動詞の C への移動はない。これは、この言語では、疑問文の C には主要部に関する EPP 素性が [-EPP] と指定されているためである。もし、疑問文の C に主要部及び指定部に関する EPP 素性が [-EPP] と指定されるとすれば、wh 移動もなく、C に全く顕在的な要素が生起しないことになる。そうした言語に Mandarin Chinese がある。この言語では、(5)のように wh 移動も C に顕在的な要素も生起しないが、解釈不可能な Q 素性を持つ非顕在的な C が、解釈可能な Q 素性と解釈不可能な wh 素性を持つ wh 句と一致を起こし、これによって両者の解釈不可能な素性が削除され、文全体が wh 疑問文としてライセンスされることになる。また、日本語は Mandarin Chinese と同じく wh 移動を誘発しない言語である。しかし、疑問文の C に主要部に関する EPP 素性が [+EPP] と指定されているため、疑問不変化詞 (question particle) が併合、あるいは Hagstrom (1998) が分析するように移動によって CP の主要部に導入される (cf. Watanabe (1992), Miyagawa (2001))。³

EPP 素性の指定は、同一の言語においても安定しているわけではない。例えば、言語習得のそれぞれ段階で異なった疑問文のパターンが観察される。⁴英語を習得している子供は生後20~24ヶ月たつと、単一の語だけでなく複数の語を統語的に組み合わせる発話を行うようになる。凡そこの時期より、子供は文尾に上昇調のイントネーションを加えることで yes-no 疑問文を発する。次の疑問文の習得の段階として、(8)のように Is や Are といった疑問不変化詞を文頭に付加することで yes-no 疑問文を表現する。この段階では、(9)のように wh 疑問文では主語・助動詞倒置は生じない。

- (8) a. Is I can do dat? Is Ben did go dere?
b. Are you put this on me? Are this is broke?
(9) a. How dat opened?
b. What you doing?

その後、主語・助動詞倒置を伴った yes-no 疑問文や wh 疑問文を使用するようになる。子供の中には、wh 疑問文に主語・助動詞倒置を行う前に yes-no 疑問文に倒置を行い、その後 wh 疑問文に倒置を施すものもいれば、同時に両方の疑問文に倒置を施すものもいる (Weinberg (1990) 参照)。

- (10) a. Can you do that? Is Ben going there?
b. How the door opened? What are they doing?

その後、埋め込み疑問文を習得する時期が来ると、その疑問文中で主語・助動詞倒置を行う。

- (11) a. I wonder [can I find the bottle]
b. Do you know [who is she]?

こうした埋め込み疑問文での倒置は、(11)のように英語の方言にも観察される (詳細は Grimshaw (1979), McClosky (1992), Cheng (1991), Weverink (1991), Rivero (1994), Henry (1995) など参照)。

- (12) a. Ask your father does he want his dinner.
b. I was wondering would he come home for the Christmas.
c. They asked who did we see.
d. I wonder what did John think would he get.

標準英語においては、主語・助動詞倒置は主節に限定され、埋め込み疑問文では生じない。これは先程述べたように、主節の CP の C に主要部に関する EEP 素性が [+EPP] と指定されているためである。また、主節の yes-no 疑問文では、wh 疑問文と対照的に CP の指定部に顕在的な要素が生起することはない。しかし、Radford (2004: 220) の報告によると、エリザベス朝の英語では顕在的な疑問詞 whether が CP の指定部に現れ、さらに主語・助動詞倒置が生じていたということである。

- (13) a. Whether had you rather lead mine eyes or eye your master's heels?
(Mrs Page, *The Merry Wives of Windsor*, III, ii)
b. Whether dost thou profess thyself a knave or a fool?
(Lafeu, *All's Well That Ends Well*, IV, v)

この事実はエリザベス朝の英語では、主節の CP の C に指定部に関する EEP 素性が [+EPP] と指定され、倒置だけでなく疑問詞の whether が CP の指定部に生起していたことを示唆している。しかし、現在の英語では、主節の yes-no 疑問文では C に指定部に関する EEP 素性が [-EPP] に、主要部に関する EEP 素性が [+EPP] と指定されるため、主語・助動詞倒置のみが生起することになる (cf. Baker (1970), Grimshaw (1993), Roberts (1993))。

では、なぜ子供の言語や英語の方言の埋め込み疑問文で、主語・助動詞倒置が生じるのであろうか。Lightfoot (1989, 1991) は言語習得の媒介変数を決定する際に必要な肯定的証拠 (positive evidence) を見いだすためには、degree-0 習得可能性 (learnability) で十分であることを示唆している。この degree-0 習得可能性とは、端的に言うと主節の構造のみが、何らかのものを新たに習得する際入手可能であるということである。これに従い、ここでは、子供が埋め込み疑問文を習得する際に、degree-0 習得可能性により、主節の統語構造を基に埋め込み疑問文を生成するとしてみよう。主節の wh 疑問文では C に指定部、及び主要部に関する EEP 素性が [+EPP] と指定されている。主節の yes-no 疑問文では、C に主要部に関する EEP 素性が [+EPP] と指

定され、指定部に関する EPP 素性が [-EPP] と指定されている。子供は degree-0 習得可能性により、それらと同じ値を埋め込み疑問文にも適用し、従って埋め込み疑問文にも主語・助動詞倒置が生じるのであろう。⁵しかし、標準英語の大人の文法では埋め込み疑問文に主語・助動詞倒置は生じない。⁶

(14) a. I was wondering [if/ whether [he would come home for the Christmas]].

b. I wonder [what [John bought]]

これは、子供がその後の段階で大人の文法を最終的に習得する際、埋め込み疑問文の C に主要部に関する EPP 素性を [-EPP] に、指定部に関する EPP 素性を [+EPP] と指定することによるものである。

以上、この節では2つのタイプの EPP 素性を仮定し、疑問文のパターン、及び素性指定の変異に伴う疑問文の共時的、通時的言語差異について考察してきた。次節では、2つのタイプの EPP 素性のうち指定部に関する EPP 素性に焦点を絞り、wh 句の循環移動に関する言語差異について考察を試みる。

3. 循環移動と EPP 素性

Chomsky (2000) では、wh 疑問文における wh 移動に関しては、素性の一致関係が移動の演算上の動機付けになっており、解釈可能な素性と解釈不可能な素性が仮定されているが、対照的に Chomsky (2008) においては、素性の解釈の可能性、不可能性が移動の演算上の動機付けにはならないことが示唆されている。これに従えば、wh 句の顕在的な移動は EPP 素性に収斂することができる。しかしながら、(7)のような wh 疑問文においては、CP 内で wh 句と C が指定部対主要部の関係で wh-agreement が生じているため、このような現象に wh 素性が関連していることは明らかである。

実際、多くの言語でこうした wh-agreement の現象が観察され、それが形態となって具現する例が多く見られる。Wh-agreement に関しては wh 句が移動する領域で生じるが、それには2つのタイプに分けられる。一つは(7)のように wh 移動が生じた際に、付随現象として主語・助動詞倒置が生じるように統語的操作が伴うものと、もう一つは wh 句が移動した領域の語彙範疇又は機能範疇に何らかの形態的变化が伴うものである。後者の wh 句が移動した領域の語彙範疇又は機能範疇に何らかの形態的变化が伴う事例においては、CP の主要部に生起する補文標識が通常の補文標識と異なり、特殊な補文標識が現れる言語と、動詞に何らかの形態変化が伴う言語とがある。Wh 移動が生じ、その領域内の CP の補文標識が特殊な形態になる言語としてはアイルランド語がある。

(15) Irish *goN-aL* alternation

a. [Wh_i [_{CP} aL/*goN ... [_{CP} aL/*goN ... [_{CP} aL/*goN [... t_i...]]]]]

b. Cé aL deir siad aL chum
Who COMP say they COMP composed
t-amhrán sint
that song

‘Who do they say composed that song?’

Chung and McCloskey (1987)

アイルランド語においては、wh 句が移動した場合、その移動領域内の CP に生じる補文標識は通常の補文標識 goN が、特殊な補文標識の aL になる。

また、wh 移動が生じ、その領域内の動詞が特殊な形態になる言語としては、Kikuyu, Palauan, Hausa, Moore があり、これらの言語では wh 移動が生じるとその領域内で動詞の形態が realis から irrealis の形に変化する。次の例は Haik (1990 : 348-352) からのものである。

(16) *Kikuyu*

a. nŃ-Ń_i Ń-ų w-eciŃri-a [Ng Ń ų a-ųų-Ńųų [áte t_i
FP-who SP-T-think-T NguŃ SP-say-T that
(irrealis) (irrealis)

o-On- Ńųų Kaanakų]]

PP-see-T Kaanake

(irrealis)

‘Who do you think Ngũgĩ said saw Kaanake?’

b. Ń-ųw⁻¹ éciŃri-á [nŃ-Ń_i NgŃųų a-ųų-Ńųų [áte t_i
(realis) FP-who (irrealis)

o-On-Ńųų Kaanakų]]

(irrealis)

‘Who do you think Ngũgĩ said saw Kaanake?’

(17) *Palauan*

a. ng-nerga_i a le-silse-ii (*silseb-ii)_i ǀ

CL-what irrealis-PF-burn-3SG realis

a se?el-il?

friend-3SG

‘What did his friend burn?’

b. t- oumerang [el ked- omdasu [e ng-mo er

R-3p believe COMP R-1p-think PTC R-3s

a Siabal a te ? ang]]

P(reposition) Japan who

‘Who do they believe that we think will go to Japan?’

(18) *Hausa*

Ban sa ban waa_i t_i yakee

NEG1s know NEG who 3sm-IR-cont

tsammaanii wai yaa /*ya

think that 3sm compl-R/IR-compl

sayi mee

buy what

‘I don’t know who thinks he bought what.’

(19) *Moore*

a Pok yā-a/*yā ānda zaame ?
 Poko see/see-IR who yesterday
 ‘Who did Poko see yesterday?’

以上のように、wh 移動が生じた場合補文標識や動詞が特殊な形態に変化する事実は補文標識が生じる CP、及び動詞が生じる vP に wh-agreement が生じることを示唆している。CP と vP は極小性理論においては位相と呼ばれるものである。こうした wh-agreement はつまり、位相の主要部が中心となって生じると言える。では、wh-agreement が生じる際の、wh 素性は CP の主要部と vP の主要部にどのようにして獲得されるのであろうか。Stowell (1982) や Rizzi (1996) では wh 素性は TP の主要部に生起すると考えられている。しかし、このように位相の主要部に wh 素性が具現化するのであれば、その素性は T ではなく、他の要素から継承されていることになる。

では、その継承とはどのようにして行われるのであろうか。考えられるものとしては、素性の浸透(percolate)である。文法素性の浸透に関しては、多くの言語において観察される。

(20) *Hidi-Urdu*

Vivek-ne [kitaab parh-nii] chaah-ii
 Vivek-Erg book.F read-Inf.F want-Pfv.F.SG
 ‘Vivek wanted to read the book.’

Bhatt (2005 : 760)

(21) *Itelmen*

t' əntxa-čəPn [mil okno-Pn sop-es]
 1SG-forger-3PL.OBJ all window-PL close-INF
 ‘I forgot to close all the window.’

Bobaljik and Wurmbbrand (2003 : 1)

(20)と(21)に挙げてあるように、Hidi-Urdu や Itelmen においては、補文の動詞の目的語が動詞と一致現象を起こし、さらに主節の動詞がその目的語と一致現象を起こしている。この事実は、補文の目的語の φ 素性が補文だけでなく主節にまで浸透していることを示唆している。

また、多くの言語で φ 素性に関する一致現象が補文標識の体系で観察される。通常、主語は TP の主要部である T と一致現象を起こすが、その一致がその主語が所属する文の補文標識にも具現する例がある。次の例は Zwart (1997 : 200) からのものである。

(22) *South Hollandic*

..datte ze ziek benne
 that-PL they sick are-PL
 ‘..that they are sick.’

(23) *West Flemish*

..da-Ø-se zie komt
 that-3SG-she she comes
 ‘..that she comes.’

(24) *Frisian*

..dat-st do jûn komst
 that-2SG you tonight come-2SG
 ‘..that you’re coming tonight.’

(25) *East Netherlandic*

..datte wy piano speult
 that-1PL we piano play-1PL
 ‘..that we play the piano.’

(26) *Brabantish*

..dadde gullie host komt
 that-2PL you almost come-2PL
 ‘..that you are almost coming.’

これらの例において、補文標識はそれが支配する主語及び T と一致し、もしその一致が崩れれば非文となる。

こうした一致現象は名詞句内でも観察される。ドイツ語やイタリア語では名詞の φ 素性が次に示すように上に浸透していく。

(27) *German*

a. der große Tisch
 the-MASC.SG big-MASC.SG desk-MASC.SG
 b. die rotten Dächer
 the-NEU.PL red-NEU.PL roof-NEU.PL

(28) *Italian*

a. la mia casa
 the-FEM.SG my-FEM.SG house-FEM.SG
 b. il mio gatto
 the-MASC.SG my-MASC.SG cat-MASC.SG

こうした現象は、 φ 素性といった文法素性が上の投射範疇にまで浸透していくことができるということを示唆している。従って、 φ 素性と同様、wh 句が持つ wh 素性も疑問文中で上の投射範疇にまで浸透していくことが平行的に考えられる。そこで、ここでは wh 疑問文において wh 素性は wh 句が所有しており、それがその wh 句を支配する投射範疇に浸透していくと考えてみる。この wh 句が持つ wh 素性であるが、Chomsky (2000) の枠組みでは、wh 句は解釈可能な Q 素性と解釈不可能な wh 素性を持つとされている。しかし、前述のように、Chomsky (2008) においては、素性の解釈の可能性、不可能性が移動の演算上の動機付けにはならないことが示唆されているため、ここではこれに従い、解釈可能性に拘らず、wh 句には単に wh 素性があり、それが浸透していくと考える。

英語においては、先に言及したように主節では wh 移動が生じた場合、主語・助動詞倒置が生じ、wh-agreement が起こる。しかし、wh 句が補文にあり、それが主節の CP に移動した場合、補文内で主語・助動詞倒置が生じることはない。これは、その補文内で wh-agreement が起こらないことを意味しているように思える。しかし、英語の方言で、例えば Belfast English では、(29)に示すように補文内に wh 句が生じ、それが移動した場合、その補文内でも主語・助

動詞倒置が生じる。

- (29) a. Who_i do you think [did John convince t_i [that Mary went]]?
 b. *Who_i do you think [did John convince t_i [did Mary go]] ?

Henry (1995 : 118)

(29)の例において、主節の think は補文に疑問文を選択する動詞ではない。それにも関わらず、主語・助動詞倒置が生じて疑問文を形成する際の現象が生起している。(29)のような事実は、wh 句が所属する補文においても wh-agreement が生じることを示唆している。どの言語も計算システムと運用システムの間インターフェイスが同じであるなら、顕在的に wh-agreement が生じないのであれば、それは非顕在的に生じている可能性がある。Belfast English では(29)のように顕在的に補文で wh-agreement が生じるが、標準英語では、それが非顕在的に生じているということである。

では、これらのことに基づいて、(30)のような英語の wh 疑問文のメカニズムを詳しく見ていくことにしよう。

- (30) a. What do you think that John bought what?
 b. [_{CP} What_j do_i-C[Q, wh] [_{TP} you t_i [_{VP} think [wh] [_{CP} what_j that[wh] [_{TP} John T[wh] [_{VP} bought[wh] what [wh]_j]]]]]]

まず、wh 句の wh 素性はそれが所属する文の vP, TP, CP へと浸透していく。では、この浸透の上限はどこまでであろうか。

- (31) I wonder [what he bought yesterday].
 (32) a. Who knows [what he bought yesterday]?
 b. John knows what he bought yesterday.

(31)において動詞 wonder は補文に間接疑問文をセレクトするが、その CP の主要部には Q 素性が指定されている。また、what の作用域は補文に限定される。(32)においては、主節、補文とも CP の主要部に Q 素性が指定され、wh 句への値を与える上で主節の wh 句が優先して値を与えられるが、主節の wh 句は主節を作用域にとり、補文の wh 句は補文を作用域にとっている。従って、wh 句の wh 素性の浸透は Q 素性が指定され作用域が決定される位置までであると言える。(30)においては主節が wh 句の作用域決定場所であるため、主節の CP の主要部に Q 素性が指定され、補文内の wh 句の wh 素性は補文の vP, TP 及び CP, さらに主節の vP, TP へ浸透し、最後に CP の主要部まで浸透する。また、wh 句の作用域は Q 素性が指定される CP までであるので、wh 句の wh 素性の浸透はその CP で飽和状態になり、それ以上の投射範囲に浸透することはない。元の位置にある wh 句は補文の vP, CP, 主節の vP の指定部を経由して主節の CP の指定部に顕在的に循環移動していくが、これはそれらの範囲の主要部に指定部に対する EPP 素性が指定されるためである。(30)において、wh 句は元の位置、補文の CP の指定部、及び主節の CP の指定部にそれぞれ表示されているが、標準英語においては元の位置の wh 句、

そして補文の CP の指定部にある wh 句のコピーは削除される。指定部に対する EPP 素性は、他の素性と結びつきその結びついた素性と関連する要素を移動のターゲットとする。従って、(30)において、補文の vP, CP, 主節の vP, CP の主要部に指定される指定部に対する EPP 素性は浸透した wh 素性と結びついているため、wh 句のみをその素性を満たす要素とする。(30)において、主節の CP の主要部には浸透してきた wh 素性があるが、それが EPP 素性と結びついているため、wh 句がその指定部に移動してくる。この文において、主節の CP の指定部には EPP 素性の指定により主語をそこに移動させる可能性もあるが、主語でなく wh 句がその CP の指定部に移動してくるのは、EPP 素性が wh 素性と結びついているためである。

英語においては顕在的な wh 移動が観察されるが、これは文内の wh 句が持つ wh 素性がその wh 句の作用域を決定する CP の主要部まで浸透し、その wh 素性に指定部に対する EPP 素性が結びつき、wh 句の移動によってその EPP 素性を満たすためであった。従って、wh 素性が指定部に対する EPP 素性と結びつか否かで、wh 移動に関する言語の類型的特点を予測することになる。つまり、wh 素性が指定部に対する EPP 素性と結びつければ、wh 移動を誘発する言語の体系ができあがり、一方、浸透した wh 素性に指定部に対する EPP 素性が結びつかなかった場合、wh 移動がない言語の体系が形成される。後者の場合、いわゆる wh-in-situ の言語を予測するが、その典型が日本語や中国語である。

- (33) *Mandarin Chinese*
 [_{CP}[_{TP} hufei mai-le shenme]]?

Hufei buy-Asp what
 ‘What did Hufei buy?’

- (34) *Japanese*⁷
 [_{CP}[_{TP} John-ga nani-o katta] no]?
 John-Nom what-Acc bought Q-Part
 ‘What did John buy?’

(33)や(34)のように中国語や日本語では顕在的な wh 移動はなく wh 句は元の位置に留まる。両者の違いとしては、先に言及したように日本語において疑問不変化詞 (question particle) が CP の主要部に併合、あるいは Hagstrom (1998) が分析するように移動によって CP の主要部に導入されるかどうかの違いである (cf. Watanabe (1992), Miyagawa (2001))。これらの例において、それぞれの wh 句が持つ wh 素性が、その作用域になる CP の主要部まで浸透している。また、wh 句の作用域を決定するために必要な Q 素性も CP の主要部に指定されている。この点では英語と同じである。しかし、これらの言語においては、指定部に対する EPP 素性が指定されず、浸透した wh 素性が EPP 素性と結びつかないために、顕在的な wh 移動が生じないのである。こうした顕在的な wh 移動を持たない言語においては、wh 句の作用域はその wh 句が持つ wh 素性の浸透が止まる、

つまり Q 素性が指定される CP の主要部までということになる。従って、wh 素性の浸透により移動することなく wh 句の作用域が決定され、それによって wh 句が含まれる文の論理形式が形成できるので、wh 句の LF での移動又は Heim (1982) 流の wh 句に対する無差別束縛 (unselective binding) は必要なくなる。

言語の中には、顕在的な wh 移動を持たない日本語、中国語と顕在的な wh 移動を持つ英語の中間的な特徴を示すものがある。フランス語がその典型である。

(35) Qui a-t-elle t rencontré t?

Who has she met

(36) Qui elle a rencontré t?

Who she has met

(37) a. Elle a rencontré qui?

She has met who

b. *A-t-elle t rencontré qui?

Has she met who

フランス語では、(35)-(37)に挙げてあるように wh 移動を示すこともあるが、その場合、主語・助動詞倒置が生起することもあるが、生起しない場合もある。また、(37)のように wh 移動を示さない場合もあり、この場合、主語・助動詞倒置は生起しないといった特徴がある。このように、同一言語内で wh 移動に関して違いが生じる場合もあるが、これはその言語で作用域を決定する Q 素性を持った CP の主要部に対して EPP 素性の指定が随意的になっているためである。こうした現象はフランス語だけでなく Coptic Egyptian にも観察される。

(38) Coptic Egyptian

a. awɔ nt-a-uei eβol tɔn?
and REL-PERF-3PL-come PCL where

'From where did they come?'

b. eβol tɔn a-tetɔn-ei e-pei-ma?
PCL where PERF-2PL-come to-DEM:SG:M-place

'From where did you come here?'

Reintges et al. (2006 : 179-180)

日本語や中国語とは対照的に、言語の中には、複数の wh 句を一度に移動させる言語がある。前節で述べたように、wh 移動は wh 句の wh 素性が浸透し、それと結びつく指定部に対する EPP 素性の要請によって駆動されているとすれば、複数の wh 句が移動した場合、その収容先は作用域を決定する投射範疇の多重指定部であることになる。これに関連する例としては、多重 wh 疑問文において、複数の wh 句をすべて顕在的に移動させる言語である。こうした言語にはブルガリア語、ルーマニア語等がある。

(39) Bulgarian

a. Koj kŭde misliš [ce e otiŭšl ___]?

who where think-2s that has gone

b. *Koj misliš [če e otiŭšl ___ kŭde]?

who think-2s that has gone where

Rudin (1988 : 450)

(40) Romanian

a. Cine cui ce ziceai [că i -a promis ___]?

who to whom what said-2s that to him has promised

b. *Cine cui ziceai [că i -a promis

who to whom said-2s that to him has promised

ce ___]?

what

Rudin (1988 : 452)

これらの言語では、wh 句が複数 CP の指定部に移動することになるが、指定部を複数許容するシステムの提案は、既に Kuroda (1988) にある。同様の提案は、Chomsky (1995, 2000, 2001), Koizumi (1995), Ura (1994, 1996) においても提示されており、これらの分析では、素性照合も複数の指定部との間で成立すると主張されている。この主張に基づき、これらの言語では、それぞれの wh 句の wh 素性が wh 句の作用域を決定する主節の CP の C まで浸透し、それらの wh 素性にすべて EPP 素性が結びつき、そのため複数の wh 句がその指定部に循環移動していると考えられる。

しかし、英語においては多重 wh 疑問文の wh 句は一つのみが移動し、残りは元の位置に留まる。これは、英語は wh 句の移動に関して複数の wh 句を収容できる指定部を持たず、一つのみを収容能力しかないのであると考えられる。従って、複数の wh 句の wh 素性は作用域を決定する CP までは浸透するが、その wh 素性の一つのみと EPP 素性が結びつき、それによって一つの wh 句が顕在的に作用域を決定する CP の指定部へ移動することになる。ただし、この移動に関しては、(41a) のように優位性効果が生じない形での移動となる。⁸

(41) a. Who bought what?

b. *What did who buy?

では、次に循環移動と wh 句の作用域決定に関する言語差異を見てみよう。英語と同様に、ドイツ語も一つの wh 句が顕在的に移動する。

(42) German

Wer hat was behauptet?

who has what claimed

'Who has claimed what?'

しかし、wh 句の循環移動に関しては、ドイツ語は partial wh-movement を起こすことで知られている。

(43) [CP Was denkt sie [CP wen_i Fritz t_i

WH thinks she whom Fritz

eingeladen hat]]?

invited has

'Whom does she think Fritz has invited?'

- (44) [_{CP} Wen_i denkt sie [_{CP} Fritz t_i eingeladen hat]]?
whom thinks she Fritz invited has

(43)のような例において、補文の wh 句は元の位置から補文の CP の指定部に移動しているが、主節の CP に wh-expletive の was が生起することで、(44)の文と同様主節を作用域にとることが可能になっている。こうした例において、主節の動詞は補文に疑問文をセレクトする動詞ではない。それにも関わらず、wh 句が補文内で移動し、あたかも間接疑問文を形成する形になっているため非文として排除されることになるが、事実は予測に反する。こうした事例に関しては、Riemsdijk (1982) 以来様々な提案がされているが、その一つに直接依存分析 (direct dependency analysis) というのがある (Riemsdijk (1982), Stechow and Sternefeld (1988), McDaniel (1989), Rizzi (1992), Bayer (1996), Müller (1997), Lutz et al. (2000) 等参照)。この分析では、概略、主節にある wh-expletive の was が補文の途中まで移動した wh 句と連鎖を形成し、それによって補文内の wh 句が主節の作用域をとることができるというものである。⁹

ここでは、wh 句の wh 素性は作用域が決定される CP の主要部まで浸透し、その wh 素性に EPP 素性が結びつき、それを満たす形で wh 句がその CP の指定部まで移動すると分析してきた。(43)のような事実はこの分析によって捉えることが可能である。(43)において、補文にある wh 句の作用域は主節の CP になるため、主節の CP の主要部に Q 素性が指定される。元の位置の wh 句 wem の wh 素性は、Q 素性が指定された主節の CP の主要部まで浸透する。補文の CP の主要部には、wh 句の wh 素性が浸透しているが、主節の動詞は補文に疑問文をセレクトする動詞ではない。従って、補文の CP の主要部に Q 素性が指定されないで、その補文が間接疑問文と解釈されることはなく、さらに wh 句の作用域が補文になることもない。そして補文内の vP, CP の主要部に浸透した wh 素性は指定部に対する EPP 素性と結びつき、補文の CP の指定部まで循環移動を起こす。Sabel (2000) によると、ドイツ語ではこうした部分的に移動した wh 句は元々虚辞の was と wh 句が(45)のような DP 構造を持っており、was が DP の主要部に生起し、それが部分的に移動した wh 句から切り離されて、主節の CP の指定部に移動する可能性を示唆している。

- (45) [_{DP} was [_{NP} wen]]

この was の移動を動機付けるものは島の効果である。次に示すように、partial wh-movement を起こす文は、通常の wh 移動と同じく島の効果を示す。

(46) *Negative island*

- a. *Was glaubst du nicht [_{CP} wen Hans t_i getroffen
WH think you not whom Hans met
hat]?
has
- b. ??Wen_i glaubst du nicht [_{CP} t_i' Hans t_i getroffen
Whom think you not Hans met

- hat]?
has

Cheng (2000 : 86)

(47) *Factive island*

- a. *Was weißt du [_{CP} wen_i sie wirklich t_i liebt]?
WH know you whom she really loves
- b. ??Wen weißt du [_{CP} t_i' sie wirklich t_i liebt]?
who know you she really loves
- Cheng (2000 : 87)

(43)のような島が was の移動に関わらない例では、was は補文の CP の指定部に部分的に移動した wh 句から切り離され、主節の vP, CP まで浸透した wh 素性と結びつく EPP 素性を満たす形で、CP の指定部まで移動することになる。また、ドイツ語では、(48)に示すように wh-expletive の was がコピーを残して移動する場合がある。

- (48) Was meinst du [was Peter glaubt [wen Maria
WH think you WH Peter believes who Maria
liebt]]?
loves

'Who do you think Peter believes Maria loves?'

この例では、最も深く埋め込まれた補文にある wh 句の wen がその補文の CP の指定部まで移動し、そこから wh-expletive の was が切り離されて、その上の補文、そして主節の CP の指定部にコピーを残しながら移動している。こうした事例も、補文の vP, CP の主要部、及び主節の vP, CP の主要部に EPP 素性が指定されて、それを満たす形で循環移動を起こしている例であるが、wh-expletive のコピーを残すという点で通常の wh 句の循環移動と異なる。¹⁰ 無論、ドイツ語には wh-expletive がレキシコンの中にあるので、このような wh 疑問文を形成することが可能であるが、英語においてはこうした wh-expletive が無いので、そもそも partial wh-movement は不可能である。

また、次のようなドイツ語の方言 (ブランデンブルク方言) では、wh 句が循環移動するとき、そのコピーを移動の途中で CP の指定部に残す場合がある。この例において、wh 句の作用域は言うまでもなく主節になっているが、partial wh-movement といった手段を使わずに wh 句が循環移動した事例と考えられる。

- (49) Wen denkst du wen sie meint wen Harald liebt?
Who think you who she believes who Harald loves
- Mahajan (2000 : 322)

こうした例は(50)に挙げてあるように、英語を習得している子供の発話にも観察されることがあるが、大人の英語の文法においてはコピーを残さない形で wh 疑問文が形成されるのは言うまでもない。

- (50) a. What do you think [what Cookie Monster eats]?
b. Who do you think [who the cat chased]?
Radford (2004 : 398)

前にも言及したように、日本語や中国語は wh 句の素性

は浸透してもそれと EPP 素性が結びつかないため顕在的 wh 移動が生起しない。これとは対照的に、以上のドイツ語やその方言の例は、wh 句の素性が浸透して、その wh 素性に EPP 素性が結びついて循環移動を起こした様々なパターンである。では、浸透した wh 句の wh 素性がその作用域を決定する主節ではなく、途中の補文まで EPP 素性と結びつく例も可能性として予測するが、実際このパターンも自然言語には存在する。以下の Ancash Quechua, Slave, Malay, Kikuyu がそうである (例文は Lutz et al. (2000 : 8) からのものである)。

(51) *Ancash Quechua*

[(Qam) kreinki [ima-ta_i María muna-nqa-n-ta [t_i you believe what M. want-NOM-3-ACC José t_i ranti-na-n-ta]]]?
J. buy-NOM-3-ACC
'What do you believe that María wants José to buy?'

(52) *Slave*

[Raymond [?ayí_i Jane t_i náyeuhndí] kodjshşç]
R. what J. 3 bought 4 3 knows
'What does Raymond know that Jane bought?'

(53) *Malay*

[Kamu fakir [ke mana_i (yang) Mary pergi t_i]]?
You think to where that Mary go
'Where do you think that Mary went?'

(54) *Kikuyu*

[Ó-γw-!éciiri-á [nōo_i Ngóγe a-úg-írε [áte t_i SP-T-think-T FP-who N. SP-say-T that o-on-írε Kaanakε]]]?
PP-see-T K.
'Who do you think Ngugi said saw Kanake?'

こうした言語では、wh 句は補文までで移動が止まっており、主節には移動していない。しかし、途中まで移動している wh 句はどれも主節を作用域にとることが可能である。こうした事例では、wh 句の wh 素性は主節の CP の主要部まで浸透しているが、指定部に対する EPP 素性との結びつきが途中の補文の CP までで終わってしまっているため、wh 句は主節にまで顕在的移動ができない状態になっている。こうした事実にも関わらず、wh 句が主節の作用域を取ることができるのは、主節の CP の主要部に Q 素性が指定され、wh 句の wh 素性がそこまで浸透しているためである。これらの例は、まさに顕在的 wh 移動を示さない日本語や中国語とドイツ語や英語といった顕在的 wh 移動を示す言語の混交型の事例であると言える。

上記の例は、wh 句又は wh-expletive が CP の指定部に生起する例であるが、wh 句の循環移動は CP の指定部だけでなく vP の指定部も経由するので、その指定部に wh 句又はそのコピーが残る可能性もある。言語の中にはこうした特徴を示すものがあり、その典型例は Hindi である。

Hindi において、wh 句は元の位置に留まる場合もあれば、顕在的な wh 移動を起こす場合もある。

(55) *Hindi*

- a. Kis-ko_i siitaa-ne socaa ki ravii-ne t_i dekhaa?
who S.erg thought that R.erg saw
'Who did Sita think that Ravi saw?'
- b. Sittaa-ne kis-ko_i socaa ki ravii-ne t_i dekhaa?
S.erg who thought that R.erg saw
'Who did Sita think that Ravi saw?'

Mahajan (2000 : 318)

(55a)の例では、補文の wh 句が文頭に移動しているが、移動先は主節の CP の指定部である。しかし、(55b)の例では補文の wh 句は主節の vP の指定部に移動していると考えられる。これら二つの例では wh 句はどちらも主節を作用域にとっているが、これは、補文の wh 句の wh 素性は Q 素性が指定される主節の CP の主要部まで浸透しているためである。しかし、その wh 素性と結びつく EPP 素性の指定場所が異なっており、(55a)の例では、補文の vP, CP, 及び主節の vP, CP の主要部に指定部に対する EPP 素性が指定されることで主節の CP の指定部まで循環移動しており、(55b)の例では、補文の vP, CP, 及び主節の vP の主要部に指定され、主節の CP の主要部には指定されなかったため両者間に wh 移動に関する違いが生じている。

4. 主要部移動

これまでは、主に XP 移動に関するものを扱ってきたが、X レベル、つまり主要部移動に関しても通時的又は共時的言語差異が観察される。例えば、先に言及したように英語の疑問文を習得している子供の発話にも通時的な言語差があり、言語習得のそれぞれの段階で異なった疑問文のパターンが観察される。英語を習得している子供は生後 20~24ヶ月たつと、単一の語だけでなく複数の語を統語的に組み合わせる発話を行うようになる。凡そこの時期より、子供は文尾に上昇調のイントネーションを加えることで yes-no 疑問文を発する。次の疑問文の習得の段階として、Is や Are といった疑問不変化詞を文頭に付加することで yes-no 疑問文を表現する。この段階では、wh 疑問文では主語・助動詞倒置は生じない。その後、主語・助動詞倒置を伴った yes-no 疑問文や wh 疑問文を使用ようになる。子供の中には、wh 疑問文に主語・助動詞倒置を行う前に yes-no 疑問文に倒置を行い、その後 wh 疑問文に倒置を施すものもいれば、同時に両方の疑問文に倒置を施すものもいる。その後、埋め込み疑問文を習得する時期が来ると、その疑問文中で主語・助動詞倒置を行う。こうした埋め込み疑問文での倒置は、英語の方言にも観察される。

こうした主要部移動に関する言語差は英語の歴史においても観察される。標準英語においては、主語・助動詞倒置は主節に限定され、埋め込み疑問文では生じない。また、

主節の yes-no 疑問文では, wh 疑問文と対照的に CP の指定部に顕在的な要素が生起することはない。しかし, 先に言及したように Radford (2004: 220) の報告によると, エリザベス朝の英語では顕在的な疑問詞 whether が CP の指定部に現れ, さらに主語・助動詞倒置が生じていたということである。

(56) a. Whether had you rather lead mine eyes or eye
your master's heels?

(Mrs Page, *The Merry Wives of Windsor*, III, ii)

b. Whether dost thou profess thyself a knave or a
fool?

(Lafeu, *All's Well That Ends Well*, IV, v)

動詞の移動に関しては英語の歴史において興味深い現象が観察される。ゲルマン系言語では V2 現象が観察される言語があるが, この V2 現象は英語においても古英語期からあった。(57) にその一例を挙げる。

(57) On twan þingum hæfde God þæs mannes sawle
gegodod

in two things had God the man's soul
endowed

'With two things God had endowed man's soul.'

(*Ælfric's Catholic Homilie* I, l.20.1, Fischer et
al. (2000: 114))

しかし, こうした V2 現象は15世紀の後半には衰退している (Kemenade (1987) 参照)。現存しているのは, wh 疑問文と否定辞移動に見られる倒置現象のみである。また, 現在のフランス語に観察される V-to-T 移動に相当するものが, 中英語期には頻繁に生起している。(58)がその一例である。

(58) a. Plinie reporteth that griphes flie alwaies to the
place of slaughter.

(R. Scot *Discov. Witchcr.* xi. xiii. (1886) 162, *OED*)

b. In doleful wise they ended both their days

(Marlowe, *The Jew of Malta*, III, iii, 21, Roberts
(1993: 253))

c. He come not in company.

(*Cursor M.* 17288 *Resurrection* 163 (Cott.), *OED*)

(58)の a では, 副詞 always の前に, b の例では浮遊数量詞の both の前に, c の例では否定辞 not の前にそれぞれ動詞が生起している。これらの例は V-to-T 移動の具体例であるが, こうした動詞の移動は16世紀の後半にはほぼ消失しており (Roberts (1993) 参照), 現在の英語では全く観察されない。

上記の動詞の移動は, Chomsky (1995) の枠組みからすると主要部に指定される V 素性と関連している。この枠組みに従えば, 動詞の移動はこの V 素性と主要部に対する EPP 素性を満たすために生起していると言える。古英語から観察された V2 現象は, den Besten (1983) 以来の分析によると CP の主要部への動詞の移動であり, その主要部に V 素性が指定されているために vP 内の動詞がそこに移動

していると考えられる。つまり, 動詞の V 素性が vP の主要部, TP の主要部, そして CP の主要部まで浸透し, その V 素性と主要部に対する EPP 素性が結びつき, その EPP 素性を満たすために動詞が CP の主要部まで循環移動していると考えられる。

また, 中英語期より観察される V-to-T 移動は動詞の V 素性が vP の主要部, そして TP の T まで浸透し, その V 素性が主要部に対する EPP 素性と結びついてその EPP 素性を満たすために動詞が T まで移動していると考えられる。

上記のようにこうした動詞の移動は通時的変遷を受け消失している。動詞の移動の消失は, 移動経路の V 素性の浸透と V 素性と結びつく主要部に対する EPP 素性の循環的欠落と言える。つまり, 古英語期には CP の主要部まで V 素性が浸透していることには変わりないが, vP の主要部, TP の主要部, そして CP の主要部の V 素性に主要部に対する EPP 素性が結びつき, それを満たすために CP の主要部まで動詞の循環移動が生起しているものであり, 時間の流れとともに, CP の主要部ではなく TP の主要部に主要部に対する EPP 素性が指定されるようになり, V-to-T 移動が生じる。こうした主要部に対する EPP 素性の指定が16世紀の後半には消失し現在に至っているものと考えられる。

このように wh 句の循環移動と同じく, 主要部移動に関しても言語によって或いは同じ言語でも EPP 素性の指定に関する違いによって共時的或いは通時的言語差が生まれるのである。

5. 結語

従来の分析では, EPP 素性が対象とするのは指定部への顕在的な句移動だけであった。この EPP 素性を主要部に対しても拡張し素性の浸透という概念を導入することで, 自然言語内の様々な wh 疑問文のパターン, 共時的・通時的差異, 及び主要部移動に関わる言語差異を説明できることを述べてきた。Wh 疑問文において Q 素性が CP の主要部に指定されると, wh 句が持つ wh 素性がその主要部にまで浸透していく。この浸透によって wh 句の作用域がその CP となる。また, 言語間で, wh の顕在的移動に関して差異が生じるが, これはこの wh 素性に指定部に対する EPP 素性が結びつくか否かによって決定されるのであり, その EPP 素性が結びつけば wh 移動が生起する体系が形成され, そうでなければ wh 移動がない体系が形成される。深く埋め込まれた補文内に wh 句がある場合, その作用域が決定する CP まで wh 句が循環移動するが, その移動は最終目的地の間に介在する, 位相の vP や CP の指定部を経由した移動となる。無論この循環移動はそうした位相の主要部に指定部に対する EPP 素性が指定され, それを満たす形で移動が生じる。この循環移動に関しても言語差異があり, wh-expletive があればドイツ語のように partial wh-movement を誘発する。一方, この EPP 素性が完全な形で循環移動の

経路にあたる位相の主要部に指定されることはなく、途中の段階で EPP 素性の指定が止まる場合がある。言語の中には、wh 句が主節 CP の指定部ではなく、補文の CP の指定部、あるいは主節の vP の指定部で止まるが、主節を wh 句の作用域にとれる言語がある。これは、まさに wh 素性はその作用域が決定される主節の CP の主要部まで浸透するが、途中の位相で EPP 素性が wh 素性と結びつかなくなったことの帰結である。つまり、wh 句の wh 素性の浸透に関してはすべての言語を通して同じであり、こうした指定部に対する EPP 素性の指定に関する流動性が wh 疑問文形成における言語差異につながるのである。

子供が疑問文を習得する過程においては、特に主要部に関する EPP 素性の指定が通時的変遷を受けやすい。疑問文形成の際の主要部移動（主語・助動詞倒置）の出没がその一例であった。標準英語においては、この主要部移動は主節のみに観察され、埋め込み疑問文では生起しない。しかし、英語の方言の中にはこうした非対称性はなく、どちらにおいても観察される。このように、主要部に対する EPP 素性の指定は流動的である。歴史的に見ても同じことが当てはまる。ゲルマン系言語に観察される V2 現象は英語においても古英語期からあったが、15 世紀の後半に衰退している (Kemenade (1987) 参照)。現存しているのは、wh 疑問文と否定辞移動に見られる倒置のみである。また、現在のフランス語に観察される V-to-T 移動に相当するものが、16 世紀の後半にはほぼ消失している (Roberts (1993) 参照)。こうした動詞の移動に関しては動詞の V 素性がそれが所属する CP の主要部まで浸透し、その V 素性と主要部に対する EPP 素性が結びつくか否かで動詞の循環移動が決定される。動詞の移動の消失は、移動経路の主要部に指定される主要部に対する EPP 素性の欠落と関連しており、こうした主要部に関する EPP 素性の指定の通時的変遷と連動しているのである。

注

¹ EPP が対象とするのは本来なら指定部への句移動、または併合であるので、主要部移動は別の扱いとなる。しかし、ここでは主要部に関わる EPP 素性が指定された場合、主要部移動または併合が指定部の場合と同様生じると考える。

² 言語の中には、疑問文中の C が持つ主要部に関する [+EPP] 素性が英語の補文標識の that 相当するものによって満たされるものがある。Quebec French, Italian Romagnolo dialect, Irish, Colloquial Moroccan Arabic, Egyptian Arabic などがそうである。

³ この言語は主要部後尾 (head final) であるため、疑問不変化詞が文尾に生じている。

⁴ 子供の言語習得の中間段階で示す疑問文に関する一連のデータは、Roepert (1990), Inada (1997), Inada and Imanishi (1997), Radford (1990, 1995) などの報告によるもので

ある。

⁵ 埋め込み疑問文の C の主要部に関する [+EPP] が、場合によっては助動詞以外の要素によって満たされる場合がある。前にも言及したように、Belfast English では埋め込み疑問文でも主語・助動詞倒置が生じる。この方言では、助動詞の代わりに補文標識の that を導入することがある。こうした事例は、中英語にも頻繁に観察される。

(i) a. I wondered where were they going.

b. I wonder which dish that they picked.

(Henry (1995))

⁶ ここでは、埋め込み疑問文に生じる whether や if は、CP の指定部に生起している点に注意。その根拠としては、中英語期には補文標識の that の左に whether や if が生起し、いわゆる二重詰め COMP を形成していたという事実である。

a. I wote not whether that the length of mater acumbred you.

I know not whether that the length of stuff encumber you

(Paston Letters, 793 III. 183, OED)

b. If þat he faughte and hadde the hyer honde.

If that he fought and had her hand

(Geoffrey Chaucer, Prologue, 399, OED)

⁷ この言語は主要部後尾 (head final) であるため、疑問不変化詞が文尾に生じている。

⁸ 英語と同じく多重 wh 疑問文において一つの wh 句を移動させるドイツ語では、(i) に示すように優位効果が観察されない (Müller (1995) 参照)。

(i) a. Wer hat was behauptet?

who has what claimed

‘Who has claimed what?’

b. Was hat wer behauptet?

What has who claimed

なぜこうした言語差異が生じるのか、また、なぜ英語には優位性効果が観察されるのかに関しては本稿の目的ではないので、これについては稿を改めて議論する。

⁹ Partial wh-movement に関しては、直接依存分析以外に間接依存分析 (indirect dependency analysis) というのがある。これは was が生じる主節の部分と wh 句が途中まで移動した補文とを分けて、両者をリンクする分析法である。この分析方法はここでの議論と直接関係しないので詳細については触れないでおく。

¹⁰ ドイツ語の partial wh-movement は補文からの wh 句の移動のみに認められ、主節内では次の例のように partial wh-movement は容認されない。

(i) *WAS ist sie warum gekommen?

WH is she why come

‘Why has she come?’

こうした現象は anti-locality と呼ばれているが、なぜこう

した例が排除されるかに関しては Dayal (1994), Müller (1995), Fanselow and Mahajan (2000), Yang (2006) 等参照。

参考文献

- Alexiadou, Artemis and Elena Anagnostopoulou (1998) “Parametrizing AGR: Word Order, Verb-movement and EPP-checking,” *Natural Language and Linguistic Theory* 16, 491–539.
- Authier, J.-Marc (1992) “Iterated CPs and Embedded Topicalization,” *Linguistic Inquiry* 23, 329–336.
- Baker, Carol Leroy (1970) “Notes on the Description of English Questions: the Role of an Abstract Question Morpheme,” *Foundation of Language* 6, 197–219.
- Bhatt, Rajesh (2005) “Long Distance Agreement in Hindi-Urdu,” *Natural Language and Linguistic Theory* 23, 757–807.
- Bayer, Josef (1996) *Directionality and Logical Form*, Kluwer, Dordrecht.
- den Besten, Hans (1983) “On the Interaction of Root Transformation and Lexical Deletive Rules,” *On the Formal Syntax of the Westgermania*, ed., by Abraham, 47–131, John Benjamins.
- Bobaljik, Jonathan D. and Susi Wurmbrand (2003) “Long Distance Object Agreement, Restructuring and Anti-Reconstruction,” *Proceedings of the North East Linguistic Society* 33, 67–86.
- Chen, Lisa Lai-Shen (1991) *On the Typology of WH-Questions*, Doctoral dissertation, MIT.
- Cheng, Lisa Lai-Shen (2000) “Moving Just the Feature,” *Wh-scope Marking*, ed. by Uli Lutz, Gereon Müller, and Arnim von Stechow, 77–99, John Benjamins, Amsterdam.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, Noam (1982) *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1993) “A Minimalist Program for Linguistic Theory,” *The View from Building 20*, ed. by Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser, 1–52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework,” *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, 89–155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) “Derivation by Phase,” *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1–52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2007) “Approaching UG from Below,” *Interfaces + recursion = language?: Chomsky’s Minimalism and the View from Syntax-semantics*, ed. by Uli Sauerland and Hans-Martin Gärtner, 1–29, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Chomsky, Noam (2008) “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory*, ed. by Robert Freidin, Carlos Otero, and Maria Luisa Zubizarreta, 133–166, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chung, Sandra and James McCloskey (1987) “Government, Barriers, and Small Clauses in Modern Irish,” *Linguistic Inquiry* 18, 173–237.
- Culicover, Peter (1991) “Topicalization, Inversion, and Complementizers in English,” ms., The Ohio State University.
- Dayal, Veneeta (1994), “Scope Marking as Indirect Wh-Dependency,” *Natural Language Semantics* 2, 137–170.
- Doherty, Cathal (1997) “Clauses without Complementizers: Finite IP-complementation in English,” *The Linguistic Review* 14, 179–220.
- Doherty, Cathal (2000) *Clauses without “That”: The Case for Bare Sentential Complementation in English*, Garland, New York and London.
- Epstein, Samuel David and Daniel T. Seely (2006) *Derivations in Minimalism*, Cambridge University Press.
- Erteschik, Nomi (1973) *On the Nature of Island Constraints*, Doctoral dissertation, MIT.
- Grimshaw, Jane (1979) “Complement Selection and the Lexicon,” *Linguistic Inquiry* 10, 279–326.
- Grimshaw, Jane (1993) “Minimal Projection, heads, and Optimality,” ms., Rutgers University.
- Grimshaw, Jane (1997) “Projection, Heads, and Optimality,” *Linguistic Inquiry* 28, 373–422.
- Haerberli, Eric (2003) “Categorial Features as the Source of EPP and Abstract Case Phenomena,” *New Perspectives on Case Theory*, ed. by Ellen Brandner and Heike Zinsmeister, 89–126, CSLI, Stanford.
- Hagstrom, Paul (1998) *Decomposing Questions*, Doctoral dissertation, MIT.
- Henry, Alison (1995) *Belfast English and Standard English: Dialect Variation and Parameter Setting*, Oxford University Press, Oxford.
- Holmberg, Anders (2000) “Scandinavian Stylistic Fronting: How Any Category Can Become an Expletive,” *Linguistic Inquiry* 31, 445–483.

- Inada Toshiaki (1997) "Interrogative Inversion in Embedded Clauses and Varieties of English," paper presented at the Fukuoka Linguistic Circles.
- Inada, Toshiaki and Noriko Terazu Imanishi (1997) "Complement Selection and Inversion in Embedded Clauses," *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of his Eightieth Birthday*, ed. by Masatomo Ukaji, Toshio Nakao, Masaru Kajita, and Shinji Chiba, 345-377, The Taishukan Publishing Company, Tokyo.
- Kemenade, Ans van (1987) *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*, Foris, Dordrecht.
- Kitahara, Hisatsugu (1997) *Elementary Operations and Optimal Derivations*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Koizumi, Masatosi (1995) *Phrase Structure in Minimalist Syntax*, Doctoral dissertation, MIT.
- Kuroda, Shige-Yuki (1988) "Whether We Agree or Not: A Comparative Syntax of English and Japanese," *Linguisticae Investigationes* 12, 1-47.
- Landau, Idan (2007) "EPP Extensions," *Linguistic Inquiry* 38, 485-523.
- Lasnik, Howard and Mamoru Saito (1992) *Move α* , MIT Press, Cambridge, MA.
- Lightfoot, David (1989) "The Child's Trigger Experience: Degree-0 Learnability," *Behavioral and Brain Sciences* 12, 321-334.
- Lightfoot, David (1991) *How to Set Parameters*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Manzini, Maria Rita (1992) *Locality: A Theory and Some of Its Empirical Consequences*, MIT Press, Cambridge, MA.
- McDaniel, Dana (1989) "Partial and Multiple WH-movement," *Natural Language and Linguistic Theory* 7, 565-604.
- McCloskey, James (1992) "Adjunction, Selection and Embedded Verb Second," Linguistic Research Report LRC-92-07, University of California, Santa Cruz.
- McCloskey, James (1996) "On the Scope of Verb-Movement in Irish," *Natural Language and Linguistic Theory* 14, 47-104.
- Miyagawa, Shigeru (2001) "The EPP, Scrambling, and Wh-in-Situ," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 293-338, MIT Press, Cambridge, MA.
- Müller, Gereon (1995) *A-bar Syntax*, Gruyter, Berlin.
- Müller, Gereon (1997) "Partial Wh-movement and Optimality Theory," *The Linguistic Review* 14, 249-306.
- Paoli, Sandra (2007) "The Structure of the Left Periphery: COMPs and Subjects Evidence from Romance," *Lingua* 117, 1057-1079.
- Pesetsky, David (2000) *Phrasal Movement and its Kin*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Radford, Andrew (1990) *Syntactic Theory and the Acquisition of English Syntax: the Early Nature of Early Child Grammars of English*, Blackwell Publishers, Oxford.
- Radford, Andrew (1995) "Phrase Structure and Functional Categories," *The Handbook of Child Language*, ed. by Paul Fletcher and Brian MacWhinney, 483-507, Blackwell Publishers, Oxford.
- Radford, Andrew (2004) *Minimalist Syntax*, Cambridge University Press.
- Reintges, Chris H., Philip LeSourd, and Sandra Chung (2006) "Movement, Wh-agreement, and Apparent Wh-in-situ," *WH-movement: Moving On*, ed. by Lisa Lai-Shen Cheng and Norbert Corver, 165-194, MIT Press, Cambridge, MA.
- Richards, Norvin (1997) *What Moves Where in Which Language?*, Doctoral dissertation, MIT.
- Riemsdijk, Henk van (1982) "Correspondence Effects and the Empty Category Principle," *Tilburg Papers in Language and Literature* 12, University of Tilburg.
- Rivero, Maria-Luisa (1994) "On the Indirect Questions, Commands, and Spanish Quotative *Que*," *Linguistic Inquiry* 25, 547-554.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," *Elements of Grammar*, ed. by Liliane Haegeman, 281-337, Kluwer, Dordrecht.
- Roberts, Ian (1993) *Verbs and Diachronic Syntax: A Comparative History of English and French*, Kluwer, Dordrecht.
- Roberts, Ian and Anna Roussou (2002) "The Extended Projection Principle as a Condition on the Tense Dependency," *Subjects, Expletives, and the EPP*, ed. by Peter Svenonius, 125-155, Oxford University Press.
- Roeper, Thomas (1990) "How a Marked Parameter is Chosen: Adverbs and Do-insertion in the IP of Child Grammar," *Papers in the Acquisition of WH*, University of Massachusetts Occasional Papers Special Edition, ed. by Thomas L. Maxfield and Plunkett Bernadette, 175-202.
- Rudin, Catherine (1988) "On Multiple Questions and Multiple WH fronting," *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 445-501.
- Ura, Hiroyuki (1994) "Varieties of Raising and the Feature-

- Based Bare Phrase Structure Theory,” *MIT Occasional Papers in Linguistics* 7.
- Ura, Hiroyuki (1996) *Multiple Feature-Checking: A Theory of Grammatical Function Splitting*, Doctoral dissertation, MIT.
- Watanabe, Akira (1992) “Subjacency and S-structure Movement of *Wh*-in-situ,” *Journal of East Asian Linguistics* 5, 373-410.
- Weinberg, Amy (1990) “Markedness Versus Maturation: The Case of Subject-Auxiliary Inversion,” *Language Acquisition* 1, 165-194.
- Weverink, Meike (1991) “Inversion in the Embedded Clause,” *Papers in the Acquisition of WH*, University of Massachusetts Occasional Papers, ed. by Thomas L. Maxfield and Plunkett Bernadette, 19-42.
- Yang, Henrietta (2006) “On Overt and Covert *Wh*- and Relative Movement in Hindi and Punjabi,” *WH-movement: Moving On*, ed. by Lisa Lai-Shen Cheng and Norbert Corver, 135-164, MIT Press, Cambridge, MA.
- Zwart, C. Jan-Wouter (1997) *Morphosyntax of Verb Movement: A Minimalist Approach to the Syntax of Dutch*, Kluwer, Dordrecht.